

富山県高体連サッカー専門部の挑戦 ～競技力向上を目指して～

富山県高等学校体育連盟研究部

1 はじめに

スポーツは人間の心身両面の育成に係わる文化であり、明るく豊で活力に満ちた社会の形成に大きな役割を果たすものである。高校生の時期に、運動部活動を通して日常的にスポーツに親しむことは、健やかな心と体を育む上で大きな意義を有するとともに、生涯にわたってスポーツに親しむ基礎を培うこととなる。

近年、少子化による子どもの数の減少や遊びの変化、ライフスタイルの多様化は教育界やスポーツ界にも大きな影響を与えています。

学校部活動では部員減少による休部や廃部が増えています。また、多くの子ども達が放課後をテレビゲームやパソコンの前で過ごすようになったために、子ども達の体力・運動能力は低下傾向にあります。さらには、教職員の減少による指導者（運動部顧問）不足、運動部顧問の非専門性や力量差、複数部活の掛け持ちによる心身の負担など指導者側の問題も表面化してきました。

そのような流れの中で、子ども達（選手）にとって今何が有効かそして富山県の競技力の向上には何が必要かを真剣に考えた結果、我々はこれまでの固定観念に囚われない思い切った試みとして県全体でのリーグ戦の導入を決意しました。高体連サッカー専門部が主となり、県サッカー協会と手を取り合いながらリーグ戦の導入・運営に取り組んできた経過について報告します。

2 競技力向上における問題点（富山県全体の底上げのために）

<選手・指導者の育成>

- (1) 年間の公式試合数の不足
- (2) 目前のトーナメント戦に向けての単発的な強化
- (3) 部員数の減少
- (4) 顧問の指導力不足
- (5) 高体連加盟チーム（以下高校チーム）とクラブユース連盟加盟チーム（以下クラブチーム）の交流の不足

<環境面の充実>

- (6) 芝生グラウンドの使用制限

3 リーグ戦導入の目的

選手・指導者の育成、環境面の充実という問題点を解決するため、「選手のレベルに応じた（レベルの拮抗した）」「長期間を通じて行われる定期的な（M-T-Mメソッドに基づいた）」「第2種（高校生年代のこと）加盟チームの全てが参加できる」リーグ戦を導入することにより競技力の向上を目指す。

（下線部は（財）日本サッカー協会2・3種リーグ改革プロジェクト骨子より引用）

（波線部は平成15年度富山県U-18リーグ実施要項より抜粋）

4 リーグ戦の概要

競技力向上における問題点を踏まえて、富山県では平成15年度より全国で初となる県内全域の高校チームやクラブチームが参加できるリーグ戦の導入を試みた。その概要は次の通りである。

<平成 15 年度>

- (1) 実施期間 5月10日(土)～9月6日(土) 最大9試合
 ※ 日程は、高体連の行事、クラブチームの行事、各校の学校行事やグラウンド調整など様々な問題点を解消できるように、リーグ毎に柔軟に決めることができるようにした。
- (2) 実施会場 参加チームのグラウンド及び公共施設
- (3) 参加資格
 ・(財)日本サッカー協会2種(高校生年代)登録を完了している者。
 ・育成リーグにおいては、加盟登録した選手が11人を満たないチームであっても実行委員会の承認が得られれば合同チームでの参加を認める。また、全日制・通信制・定時制課程の混合チームの場合も同様である。
 ・育成リーグにおいては、委員会の承認を得られれば登録選手数が多いチームからの複数チーム参加を認める。また、複数チーム間のエントリー変更を認める。
- (4) リーグ構成
 ①強化リーグ(8チーム×2グループ:T1[1部], T2[2部])
 ア) 富山県高体連サッカー専門部より推薦される14チーム
 イ) 富山県クラブユース連盟より推薦された2チーム
 ②育成リーグ(9チーム×4グループ:T3A、T3B、T3C、T3D)
 ア) 参加を希望するチームまたは合同チーム
 イ) 複数チームを構成できる高校およびクラブ。
 ウ) 初年度に限り、抽選によるグループ分けを行うが、次年度以降は成績によるランク分けにて実施する。
 ※ 次年度以降リーグ戦に新たに参加するチームは、育成リーグ最下位のリーグからの参加となる。
- (5) 競技方法
 ①強化リーグ(2グループ)と育成リーグ(4グループ)に分け、8～10チームによる1回戦総当たりリーグ戦方式とする。
 ②順位決定は、勝ち:3点、分け:1点、負け:0点とする勝ち点制とする。ただし、勝ち点と同じ場合は、得失点差、総得点、当該チームの対戦結果、抽選の順で順位を決定する。
 ③試合時間は80分(インターバル10分)
 ※ 高校総体での試合時間は70分、高校サッカー選手権大会では80分となっている。
- (6) 競技規則
 ①(財)日本サッカー協会制定「サッカー競技規則」による。
 ②試合開始前に最大9名の交代要員の氏名を主審に通告しておき、4名まで主審の許可を得て交代することができる。ただし、育成リーグにおいては9名とする。
 ※ これまでのトーナメント戦(公式戦)での交代人数は3名までとなっている。
- (7) 資格
 ①T1[1部]1位・2位チームは「U-18北信越リーグ」の富山県代表として推薦され、1位チームは北信越リーグに自動昇格される。
 ②各リーグにおいて、上位2位、下位2位になると、上位リーグ、または下位リーグとの入れ替え戦となる。
- (8) 審判
 ①参加各チームでユース審判(資格取得者)を育成し、積極的に活用する。
 ※ サッカー協会の協力を得て、講習会等を開催し資格を取得させる。
- (9) 引率責任者
 ①高校チームは部活動顧問または学校長が認めたコーチングライセンス保持者とする。クラブチームは、コーチングライセンス保有者とする。

<平成 16 年度>

前年度の実施結果を踏まえて、平成 16 年度より変更及び追加された点は次の通りである。

最も大きな変更点は試合数の大幅な増加。これまでの倍の年間 14 試合とした。

- (1) 実施期間 4 月 24 日 (土) ～11 月 14 日 (日) 最大 14 試合
- (3) 参加資格 ・出場チームの同一下部組織第 3 種 (J F A クラブ申請済みクラブ) 登録選手に限り、種別変更 (移籍) せずに第 3 種登録選手のまま出場を認める。
- (4) リーグ構成 ① T2 [2 部] リーグ (8 チーム×2 グループへの変更)
前年度の結果により決定したチーム
② T3 [3 部] リーグ (8 チーム×3 グループへの変更)
- (5) 競技方法 ① 2 回戦総当たり (前期、後期) リーグ戦方式へと変更。
② T3 リーグの試合時間は 70 分と短くなる。

<平成 17 年度>

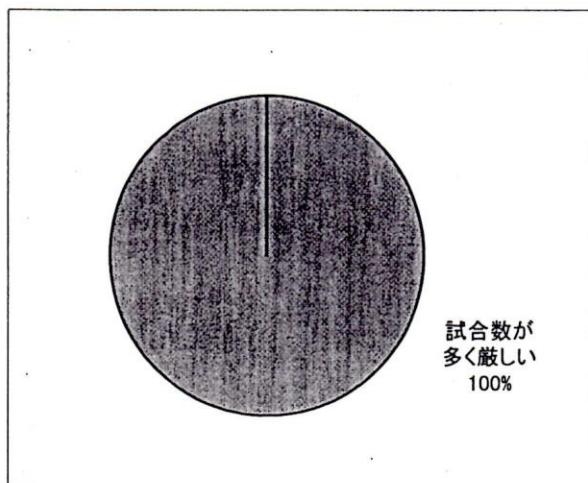
16 年度は試合数が多くなりすぎ過密日程になったため、リーグ戦を 7 試合を基準に戻し、その後にプレーオフリーグ 3 試合を加えた合計 10 試合の日程に変更した。また、高校 2 年生以下の年代における新人戦に変わるリーグ戦も 3 試合行った。

- (1) 実施期間 4 月 29 日 (金) ～11 月 23 日 (水) プレーオフリーグを含む最大 10 試合
- (4) リーグ構成 ① ファームリーグの追加
複数チーム同士によるリーグ戦 (上位リーグにはつながらない)
② U-17 リーグ (6 チーム×4～8 グループ)
※ 実施は U-18 リーグ後の 11 月に (新人戦の位置づけで)
- (5) 競技方法 ① 1 回戦総当たりのリーグ戦方式に戻る。
② プレーオフリーグの追加
各リーグ 1 回戦総当たり後、新たに上位と下位に分かれ順位決定を行う。

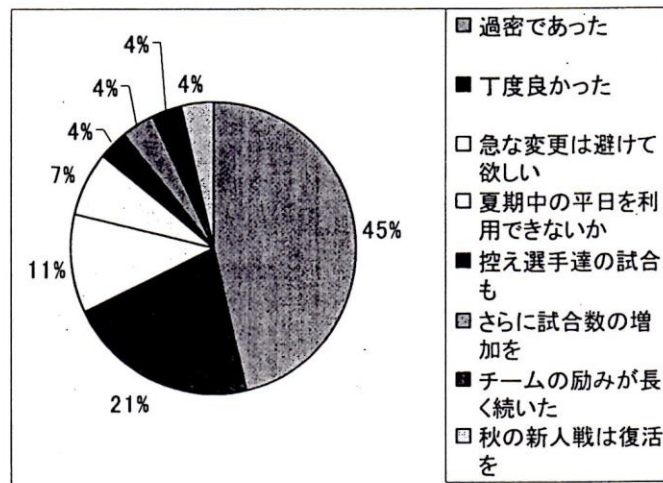
5 リーグ戦終了後 (平成 16 年度) のアンケート結果

(1) スケジュールについて

<選手>

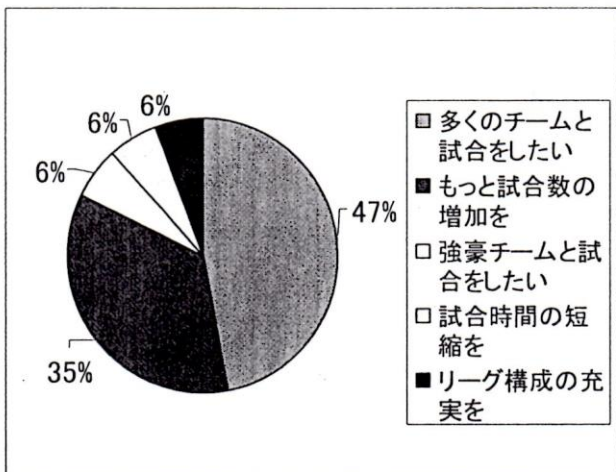


<スタッフ>

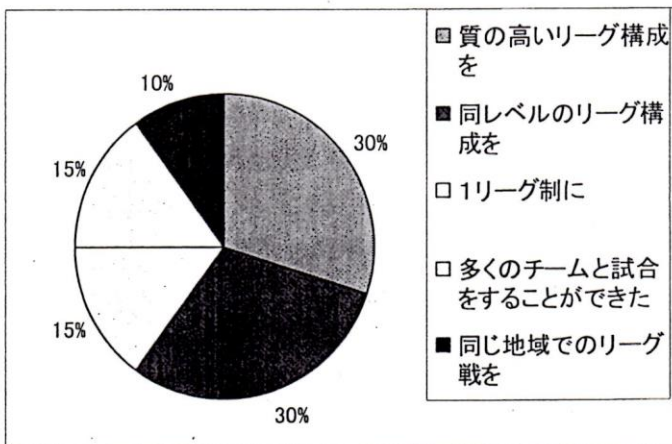


(2) リーグ構成などについて

<選手>

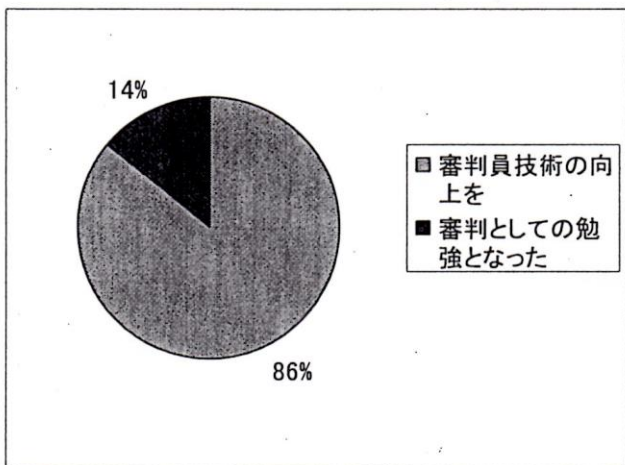


<スタッフ>

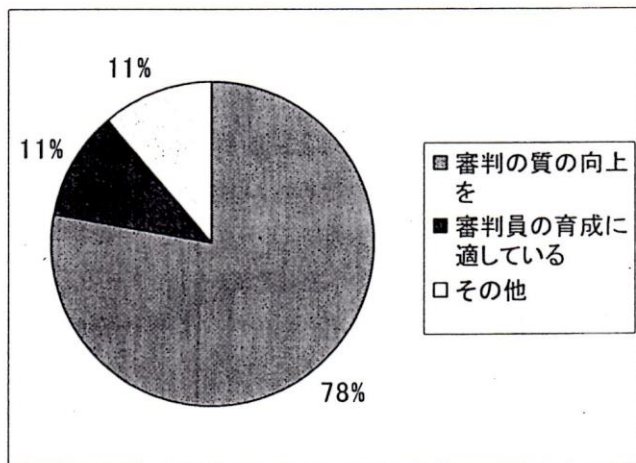


(3) 審判について

<選手>

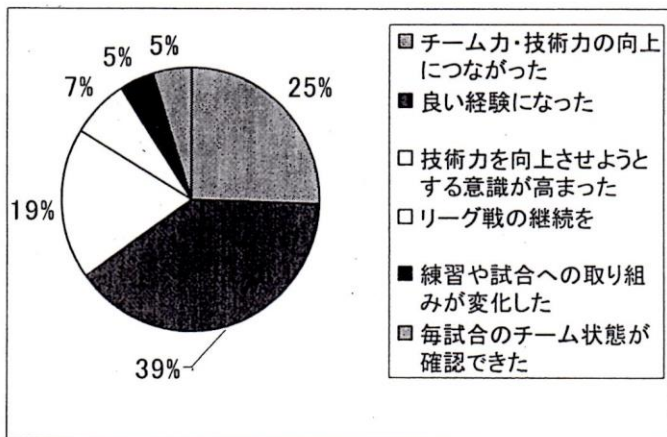


<スタッフ>

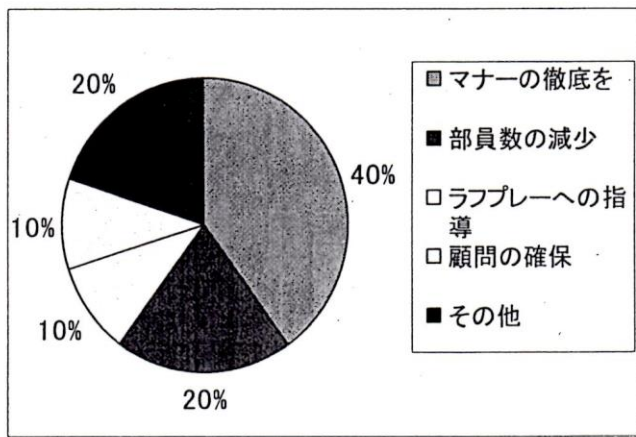


(4) 感想など

<選手>

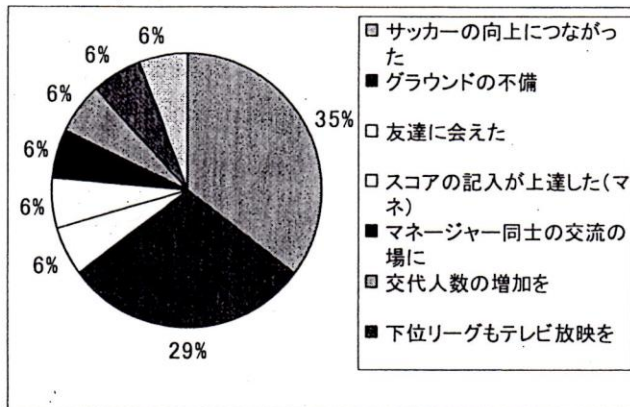


<スタッフ>

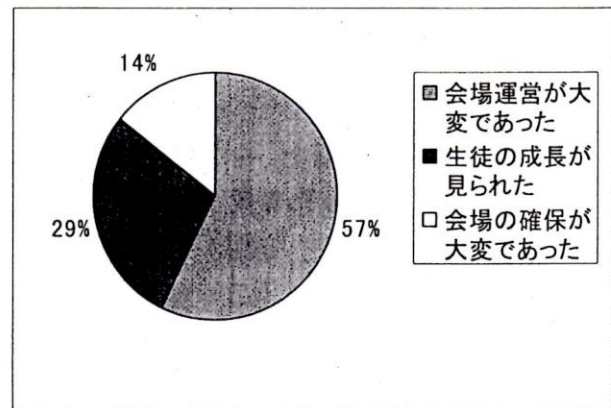


(5) その他

<選手>



<スタッフ>



6 リーグ戦の成果

<選手・指導者の育成>

(1) 年間の公式試合数の増加

リーグ戦導入前までは、年間の公式戦は春季大会・高校総体・高校サッカー選手権大会・新人戦の4つの大会がトーナメント方式で行われ、すべて一回戦で敗退した場合公式戦は4試合しかなく、試合を通しての競技力向上が難しい状況であった。

リーグ戦を導入してからは、U-18・17リーグ合わせて最低10試合(H17・18年度実績)、高校総体・高校サッカー選手権大会で最低2試合、合わせて12試合となり公式試合数は大幅に増加した。

(2) リーグ戦に対する継続的な強化

長期的・定期的に試合が行われるのでM-T-Mメソッドに基づいた指導がしやすくなり、その結果選手の技術・戦術が向上しサッカーへの理解が深まった。また、指導者も勝敗の原因の解明や次に対戦するチームの分析を行い、それをトレーニングに結びつけていくので、以前のようなトーナメント戦に向けた単発的な強化ではなく年間を通じた継続的な強化が可能になった。(目標の具体化)

(3) 出場機会の確保

生徒数の減少にともなって選手数の確保が困難なチームが増えており、特に6月の高校総体後の3年生の引退が定着化している普通科高校ではさらなる部員数の減少に苦しんでいた。しかし、リーグ戦は4~9月までの間で日程が確定しており、進学を目指す生徒も計画的に勉強とのバランスを取りながらサッカーを続けるようになった。

また、リーグ戦では合同チームでの参加が認められており、部員数が少なくて試合に出られないという事態は回避できるようになった。

反対に選手数が多すぎて試合に出られなかった選手が複数チームやファームリーグで公式戦に出場できるようになったため、一度の出場機会もなく補欠のまま卒業する選手がいなくなった。

(4) 顧問の指導力の向上

サッカー未経験の顧問も多く存在しており、すべての顧問に競技力向上を求めるのは困難である。特にリーグ戦導入以前は年4回の公式戦の時だけ引率するという顧問も少なからず存在した。

しかしリーグ戦の場合、勝敗に関わらず年間を通して同じリーグの指導者達が同じテントの中で過ごすことになるため、コミュニケーションを深めていくことになる。そこで、自然にサッカーの面白さに気づいたり、指導方法を学んだり盗んだりして指導力を向上させていくことができた。

(5) 高校チームとクラブチームの交流

リーグ戦導入前は高体連に加盟している高校チームと加盟していないクラブチームはこれまで同じ土俵で試合を行う機会はなかったが、リーグ戦ではその垣根を取り払った。その結果高校チームとクラブチームとの交流が可能になり、お互いに刺激し、理解しあえるようになった。

<環境面の充実>

(6) 整備された試合会場（芝生）

リーグ戦導入以前は全国大会に繋がる高校総体と高校選手権の準決勝と決勝だけが芝生のグラウンドで試合ができた。しかし、リーグ戦では1部リーグ（T1）はほぼ毎試合、2・3部リーグ（T2・T3）も数試合が芝生で試合できるようになり、選手の技術が飛躍的に向上した。

(7) マスコミの協力

地元新聞社とテレビ局の協力により選手の活躍がより大きく詳細に報道されるようになり、選手の試合に対するモチベーションが高まった。

新聞社は試合の結果だけではなく、得点者の名前も掲載してくれた。また、テレビ局は毎節の結果をゴールシーンのダイジェスト版で伝えるとともに、各チームを訪問しフリーキックの技術を競うイベントを企画してリーグ戦を大いに盛り上げてくれた。

7 今後の課題

- ・ 競技力向上につながる日程の組み方
- ・ 試合数の増加に伴う過密日程や選手・指導者の負担増、試合会場や審判の確保など
- ・ 芝生グラウンドの確保
- ・ U-16（国体選抜チーム）の参加方法
- ・ その他山積

8 おわりに

これまでの固定観念に囚われない思い切った試みとしてリーグ戦を導入し、毎年試行錯誤を繰り返しながら現在の形まで持ってくることができた。また、富山県全体へのリーグ戦文化の普及という意味ではある程度の成果をあげることができ、(財)日本サッカー協会内でも全国に先がけた好事例として様々な場で紹介していただいている。

しかしながら、上記にあげた課題について、積極的になればなるほどその弊害が新たに生じるという第2段階の課題にぶつかっているのが実状である。そしてなによりもリーグ戦導入の目的である「競技力の向上」がどの程度達成されているのかは現段階では判断できないが、少なくとも県代表チームの全国大会での結果から推し量るとまだまだ努力を続けていかなければならないのは明白である。これまでと同様に、細かな課題をその都度修正しながらリーグを整備し、富山県全体のレベルを底上げすることによって競技力を向上させたい。

最後に、このリーグ戦の導入そして継続の背景には富山県高等学校体育連盟サッカー専門部の素晴らしいチームワークがあることをご披露しておわりにさせていただきたい。